

令和7年度企画展  
「浅間山噴火と越谷」  
展示パネル

(レイクタウン防災フェス関連事業)

# 浅間山噴火と越谷

## はじめに

北から見た現在の浅間山。麓には高原野菜の農園やリゾート地が点在しています。

(写真: 嬬恋郷土資料館所蔵)



日本列島には火山が多く分布しています。私たちは古来その恩恵を受けてきましたが、時には大きな災害になることも少なくありません。

江戸時代後半、今から 240 年余り前、越ヶ谷宿から 130 km ほど離れた浅間山が大噴火しました。一連の活動が関東で収束までに 3 ヶ月かかったそうです。この間、麓の村々は勿論、越ヶ谷周辺でも大きな影響があり、人々は大いに“難儀（苦しく辛い状態）”をしたと、記録されています。どのような被害、苦勞だったのでしょうか。そして、どのように復興しようとしたのでしょうか。そこには先人たちの驚くべき姿がありました。

このことは現代の私たちにも何らかの示唆を与えてくれているように思われます。そのことを皆様と考える機会にできれば有難く存じます。

令和 7 年（2025 年）

越谷市教育委員会

あさまやまおおやけ

1

## 浅間山大焼

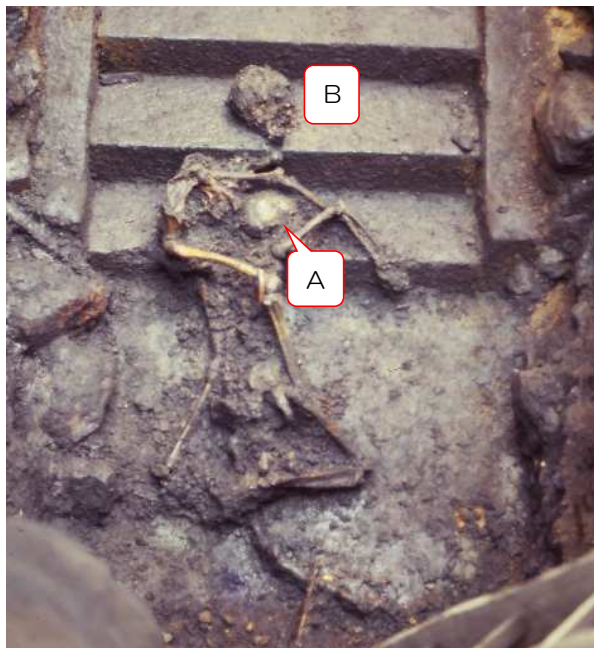
あさまやまやぶんおおやけのず  
「浅間山夜分大焼之図」

(美齊津洋夫氏所蔵 浅間縄文ミュージアム画像提供)

天明3年(1783)夏の大噴火は「大焼」とか「焼け出し」などと称され、いくつかの絵図や文書に記録されています。この絵には夜でも噴出する溶岩の赤い色や噴煙、稲妻が描かれていて、人々の驚きや恐怖感を表しています。関東一帯で火山活動が収束するまでに3ヵ月かかったそうです。(噴火の経緯はパネル④をご参照ください。)

降灰は時期によって北に200 km、北東方面に400 kmあまり、南東方面に150 kmあまりにも及びました。土石流による村落(家屋や耕地)の壊滅や数千ともいう人馬の犠牲、噴煙や降灰による農作物への影響は当時の社会構造とも相まって、前年から始まっていた関東・東北の飢饉被害を増大させました。(天明の大飢饉)

## (1) 観音堂石段下の犠牲者



鎌原観音堂

埋まった  
35 段の石段

二人の遺体

## 石段下の犠牲者 (写真：郷土資料館所蔵)

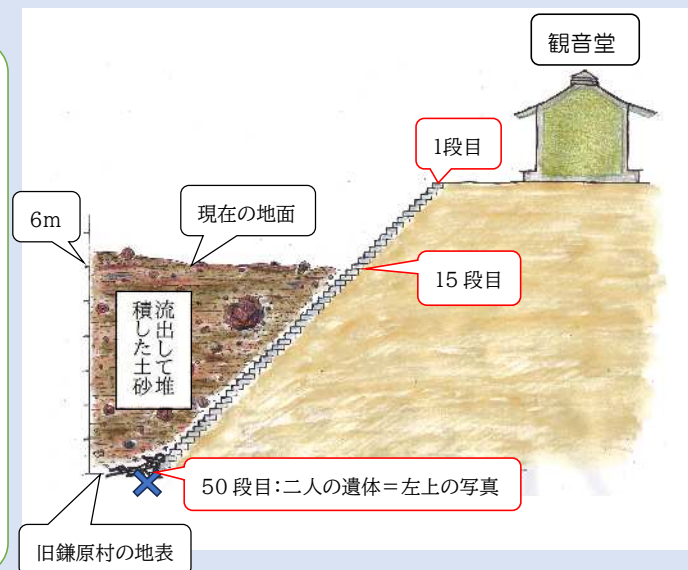
1979 年 (昭和 54 年)、観音堂石段最下部の発掘調査で発見されました。この階段は元々 50 段でしたが、土石流で下の 35 段が埋まってしまいました。

\* 遺体 A : 30~50 歳で脚は階段を上ろうとした状態。

\* 遺体 B : 45~65 歳。A にかぶさるような姿勢で、脚は伸びた状態。

このことから、A さんは足の不自由な B さんを背負って石段を駆け上がろうとした瞬間に土石流の下敷きになったと見られています。この二人の関係 (親子、姉妹等) は不明です。石段の上部には先に駆け上がった何人かの村民が避難していました。

(『天明 3 年浅間山大噴火による埋没村落の発掘調査』(学習院大学)などによる)



観音堂

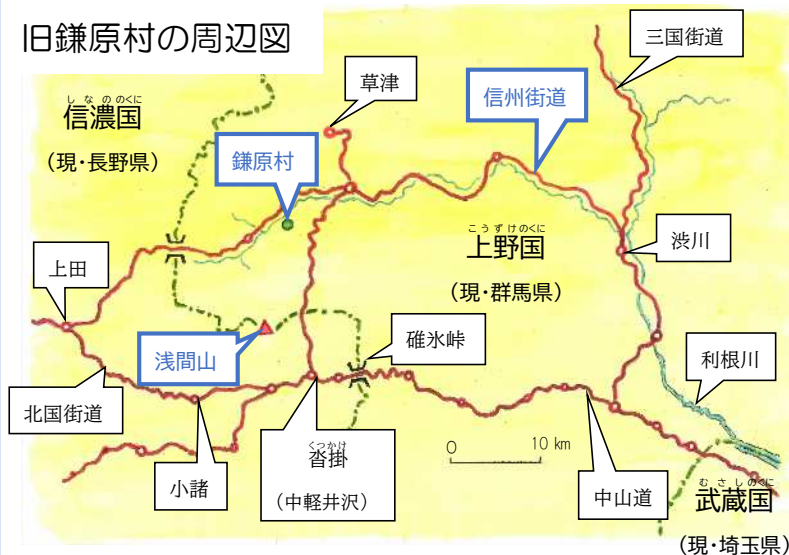
1 段目

15 段目

50 段目: 二人の遺体 = 左上の写真

旧鎌原村の地表

## 旧鎌原村の周辺図



海の民話のまちプロジェクトとして、浅間山噴火の被害と復興をアニメーション化した動画「鎌原観音堂石段ものがたり」を、右の二次元コードからご覧いただけます。

このプロジェクトは日本財団「海と日本プロジェクト」の一環で、日本各地の無形文化財である海の民話を「海ノ民話アニメーション」として有形化し、アーカイブして次世代へと語り継ぐ取り組みです。

©一般社団法人日本昔ばなし協会／日本財団海と日本プロジェクト



日本財団  
海と日本プロジェクト

## 旧鎌原村の人々

この地域は現代では高原野菜の産地として知られています。近世には信州街道上、長野や須坂と江戸を結ぶ重要な場所でした。そのため当時の鎌原村では馬を使った運送に携わる人々が多くいました。

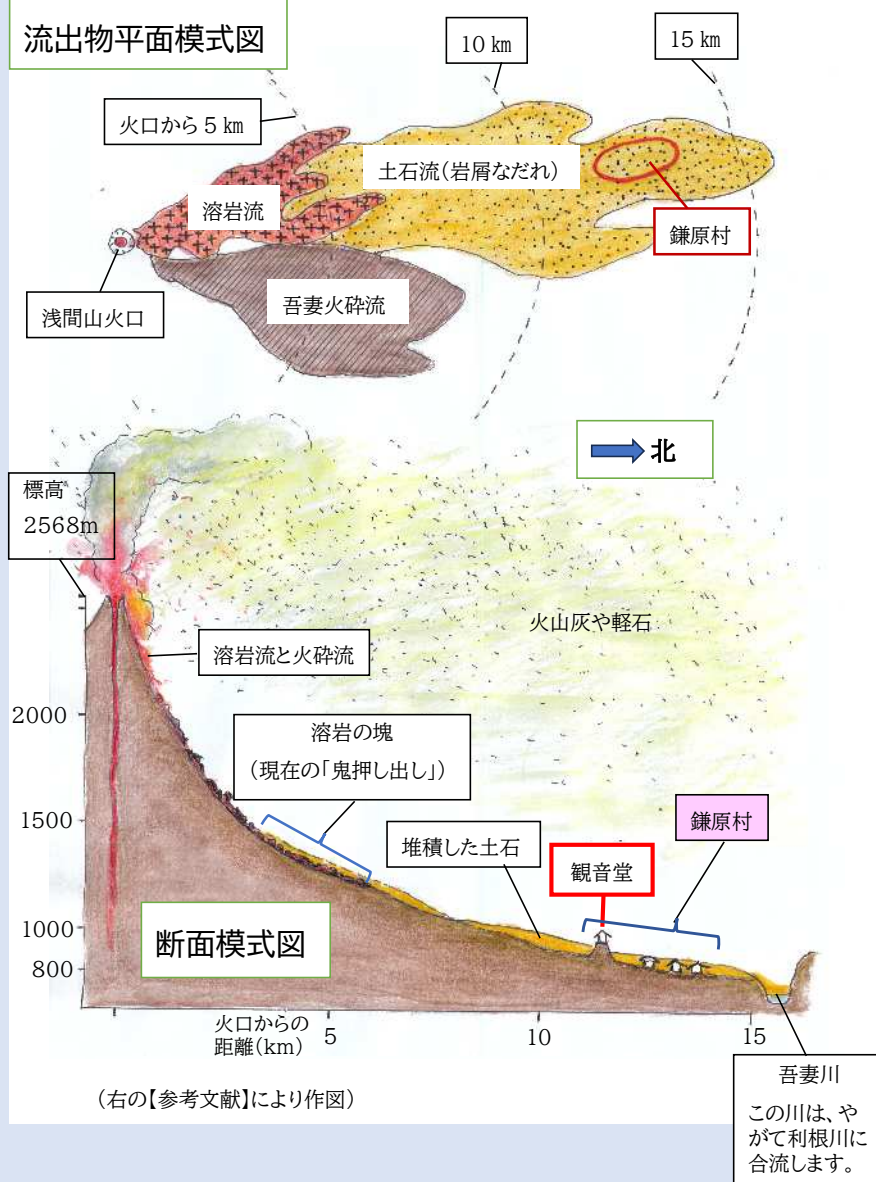
## (2) 噴火と麓の村

### 現在の旧鎌原村

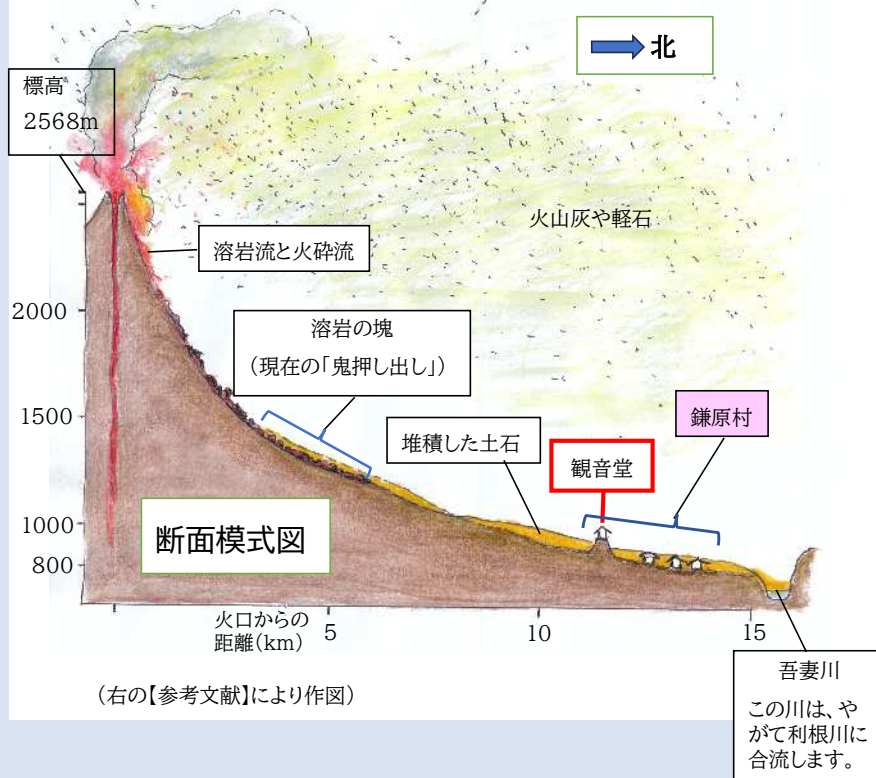
(写真: 孺恋郷土資料館所蔵)



### 流出物平面模式図



### 断面模式図



(右の【参考文献】により作図)

### かんばらむら 何が鎌原村を埋めたか

以前は火砕流（噴石や溶岩による熱泥流）と思われていましたが、昭和54年（1979年）以降の調査・研究により、現在では次のように考えられています。

- ◆大規模な噴火、震動により火口から5kmで発生した**土石流（岩屑なだれ）**。（一部に溶岩が含まれた部分もあり）
- ◆鎌原村南端では当時の地表面をほぼ保ちながら土石流が押し流れていきました。
- ◆土石流が鎌原村を襲った時には、人間の走る速さをかなり上回る速度だったようです。
- ◆この土石流は鎌原村を埋めた後もさらに流れて**吾妻川**を下り、利根川や江戸川にも大量に流下しました。

### 【参考文献】

- ・『天明3年(1783)浅間山大噴火による埋没村落(鎌原村)の発掘調査』(学習院大学 昭和57年)
- ・『鎌原遺跡(令和3・4・5年度調査報告)』(孺恋村教育委員会)
- ・『災害と復興 天明三年浅間山大噴火』(孺恋郷土資料館編 新泉社 2022年)

## (3) 噴火の経緯

【データの出典】

- ①『浅間山大噴火の爪痕』燐恋郷土資料館(新泉社)、  
②『天明3年(1783)浅間山大噴火による埋没村落(鎌原村)の発掘調査』(復刻版)学習院大学)

| 旧暦月日  | 新暦月日  | 状 況                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-------|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4. 8  | 5. 8  | 噴火始まる。                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 5. 26 | 6. 25 | 鳴動、降灰。                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 6. 18 | 7. 17 | 鳴動、噴火。軽井沢宿に軽石降る。                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 6. 29 | 7. 28 | 噴火、降灰、軽石降下。                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|       |       | ↓ 激 化                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 7. 6  | 8. 3  | 激しい噴火、大量の軽石降下。                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 7. 7  | 8. 4  | 夜、火口から溶岩流が北東側に流出。                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 7. 8  | 8. 5  | 大爆発。幅30間(約54m)、高さ数百丈(1000m以上)の噴煙が北側に崩落。溶岩流も火口から北側に流出し北側に下った。その途中、大量の岩や土砂を巻き込み、火口から3里(約12km)の鎌原村を埋めた。さらに土石流は吾妻川まで流れこみ、川の所々を堰き止めて崩壊させる洪水を起こした。洪水は周辺の家や田畑をのみこみ、数えきれないほどの人馬を押し流した。粘性の強い溶岩流は途中で冷え固まった。(後の「鬼押し出し」)<br>軽井沢宿には真っ赤に焼けた火山弾が降り、直撃で死者も出た。162戸の家のうち、52戸は焼け、82戸は軽石の重みで倒壊した。 |



©一般社団法人日本昔ばなし協会／日本財団海と日本プロジェクト  
海の民話のまちプロジェクト「鎌原観音堂石段ものがたり」の一場面

## (4) 鎌原村の被害状況

- ◆当時の村の総人口：①では608人 ②では597人
- ◆犠牲となった人数：①では477人 ②では466人
- ◆生存者：131人。このうち、\*奉公等で村外にいた人は38人。

【データの出典】

- ②『浅間山大噴火の爪痕』燐恋郷土資料館(新泉社)、  
②『天明3年(1783)浅間山大噴火による埋没村落(鎌原村)の発掘調査』(復刻版)学習院大学)

\*村内にいた人で高台等に避難した人は93人(村内生存率16%余り)

- ◆当時の村内の戸数：93戸全壊。このうち58戸は一家全滅。
- ◆馬の犠牲：200頭のうち170頭
- ◆村落に堆積した土石の厚さ：5～10m。

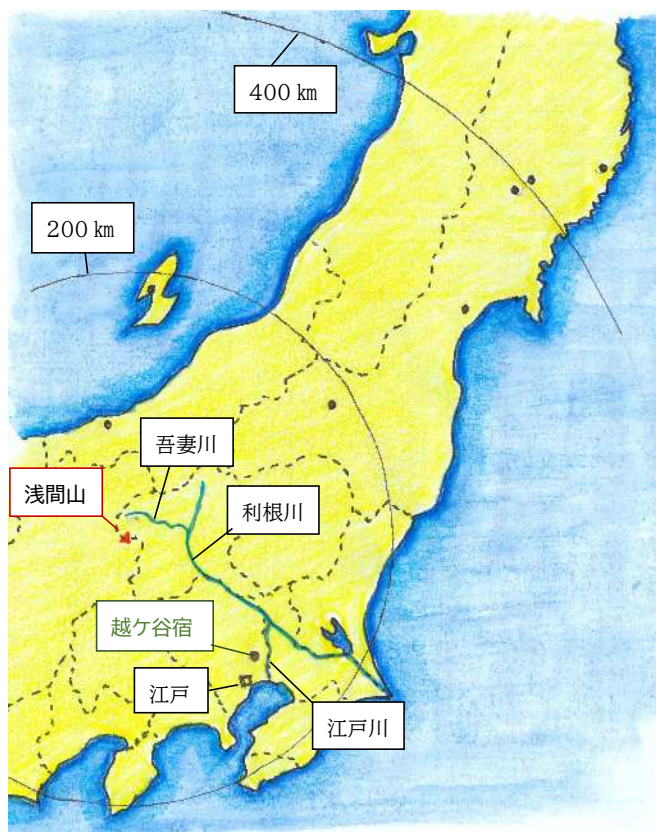
鎌原村では生き残った93人で村の再建を図ります。どのようにしたのでしょうか(展示パネル⑧)



浅間山  
火口から約5kmの「鬼押し出し」(当時の溶岩)

# 3 その時、越ヶ谷では…

## (1) 東日本の被害状況



### 被害の拡大

浅間山北麓の村が最も大きな被害を受けましたが、被害はそれだけにはとどまりませんでした。

◆ 地図中の黒点⇒降灰が記録された場所

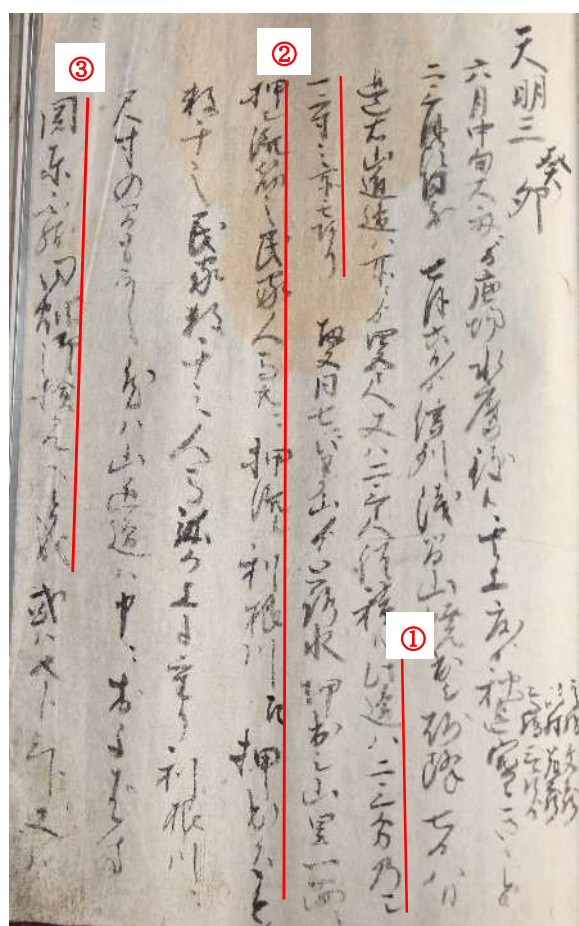
◆ 吾妻川・利根川・江戸川⇒膨大な量の土石流が洪水を繰り返しながら流下し、<sup>おびただ</sup>夥しい人馬の遺体が太平洋や江戸湾に流されました。江戸川区の善養寺には、「天明三年浅間山噴火横死者供養碑」が建てられています。

### 越ヶ谷付近の記録

二つの越谷市指定文化財史料からご紹介します。

- ◆ 『<sup>こしまき</sup>越巻中<sup>おびしや</sup>新田の産社祭礼帳』(現・越谷市新川町付近にあった村の記録)
- ◆ 『西方村旧記 参』(現・越谷市西方付近にあった村の記録)

## (2) 『越巻中新田の産社祭礼帳』に記録された噴火



### “オビシヤ”の記録

- ① この近辺では灰が1～2寸(5 cm前後)積もった所もあった。
- ② (吾妻川流域の)多くの民家や人馬が利根川に流された。
- ③ 関東では田畑に<sup>けみ</sup>検見の役人が入った。

(「検見」とは収穫状況を検査することで、税率を算出する資料にしました。左の史料を現代文にしたものが配付資料にあります。)

この史料は越巻地区(現・新川町)の“オビシヤ”行事で360年余りも受け継がれている記録です。オビシヤは「御歩射」や「御奉射」などと言われたものが訛ったものだそうで、農村の神社で古来催されている行事です。越巻地区では旧正月の2月に行われますが、これは春・一年の始まりにあたって豊作や地域の安寧を祈念したものでしょう。

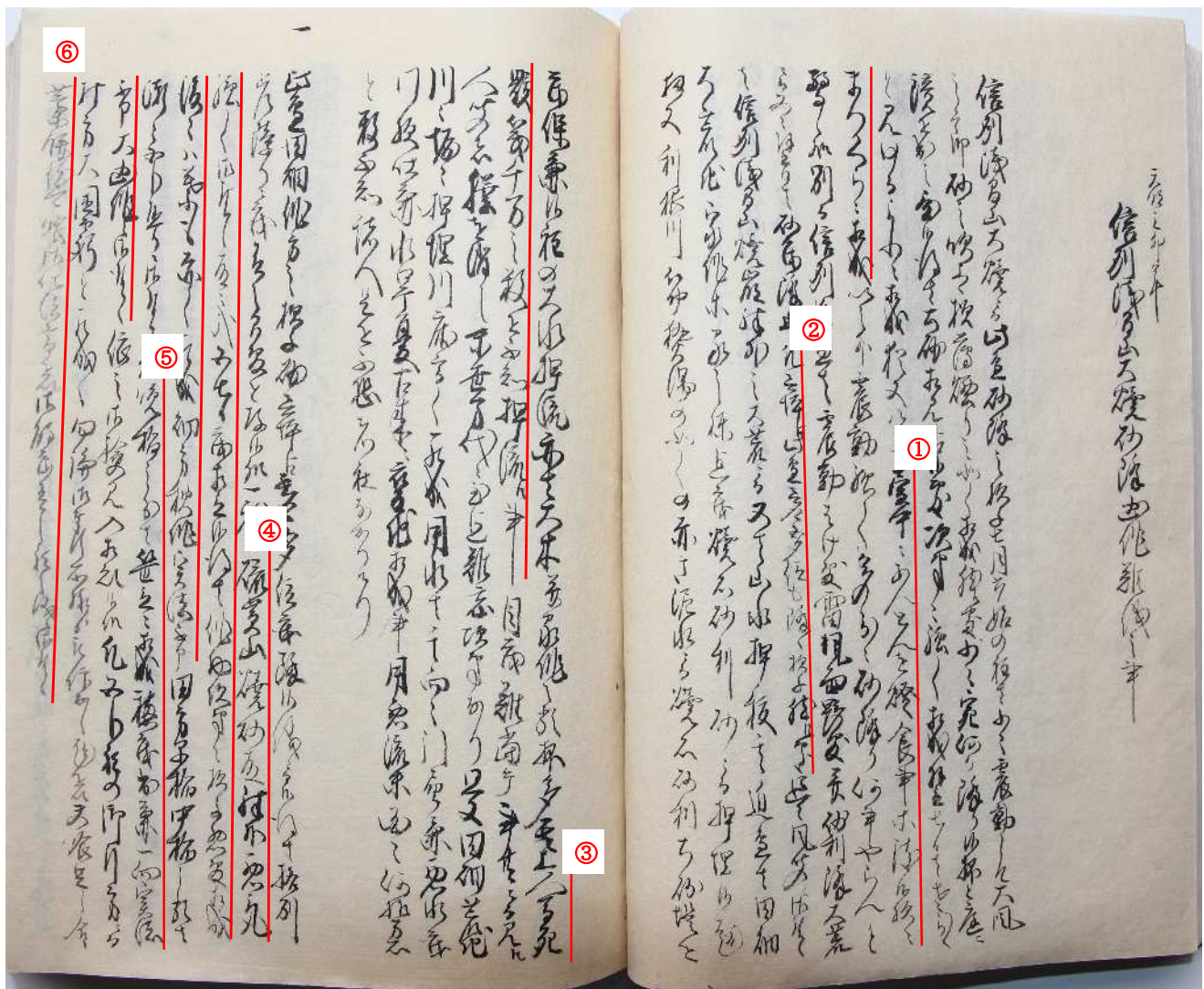
(参考文献:『オビシヤ文書の世界』

(岩田書院)、『埼玉のオビシヤ行事』(埼玉県教育委員会))



旧越巻村の村社

# ⑥ (3) 「信州浅間山大焼砂降凶作難儀之事」(『西方村旧記』より)



① 真昼でも行燈を灯して食事をするほど真っ暗になった。

② この辺り（越ヶ谷宿や西方村）では一坪（<sup>ひとつぼ</sup>3.3 m<sup>2</sup>、畳2枚分）  
あたりに一合五勺（<sup>ごうしゃく</sup>コップ1杯半）の砂（灰）が降った。

③ （浅間山北麓、吾妻川流域の村々から）人馬の死骸は何千万とも分  
からないほど押し流されたとのことだ。

④ 硫黄山の火山灰なので特に有毒なのか、5～7日も経つと作物  
への悪影響も出始めて、葉が赤くなって実らなくなった。

⑤ 晩稲は穂が出ずに大凶作となった。

⑥ 蕡餅の作り方のお触れがでるほどだった。

（この史料を現代文にしたものが配付資料にあります。）

・行燈＝菜種油や魚油を燃やして明かりとする照明具。

・晩稲＝早めに育てて収穫する早稲に対して、これよりやや遅れて育てる品種。

・蕡餅＝飢饉（凶作）の際に食料としたもの。蕡を細かく刻み、さらに粉にして米粉  
や麦粉、芋などと練り合わせて餅にしたもの。

## 『西方村旧記』

文政年間（1818～1830年）

に西方村の有志が編纂した記録で  
す。西方村は元荒川や瓦曽根溜  
井、葛西用水が近くにあったの  
で、治水や農業について詳しく記  
録されています。

## 4 復 興

## (1) 越ヶ谷では

**浅間山大噴火による不作の影響** (『越巻中新田の産社祭礼帳』より)

米価の高騰……金1両で買える米 (1斗 $\div$ 18匁 1升 $\div$ 1.8匁)

◆天明3年 秋：4斗5升 $\sim$ 5斗6升 $\rightarrow$ 天明4年1月：3斗8升 $\sim$ 4斗1升

奥州辺りでは大飢饉で大勢の人が死んだ。結局は寒冷のために五穀が実らなかったからだ。

**取り組み**

① 村から「<sup>けみ</sup>検見」を願い出た (検見＝田の収穫量を検査して年貢率を決めること)

その結果、\*五分程度の割引だったので村としては大困窮した。(『西方村旧記』より)

\*二分、三分の割引、又は六分、七分引き、あるいは全くない村もあった。

(『越巻中新田の産社祭礼帳』より)

② 瓦曽根村名主の中村重梁は粟50俵を供出した。(『中村彦左衛門重梁墓誌』による)



©一般社団法人日本昔ばなし協会／日本財団海と日本プロジェクト

海の民話のまちプロジェクト「鎌原観音堂石段ものがたり」の一場面

## (2) 幕府による被災地の復興策

◆勘定吟味役・根岸<sup>やすもり</sup>鎮衛<sup>みみづくら</sup> (『耳囊』の作者)らを被災地(吾妻川・利根川流域)に派遣して実態調査をした。後に被災地域の復旧計画を立てさせた。

◆救助米を手配して被災地に分配した。

◆熊本藩に“お手伝い普請”(費用を負担させる復興土木作業)をさせた。

総費用96,900両。(根岸鎮衛<sup>みみづくら</sup>『耳囊』(岩波文庫)、『天明3年(1783)浅間山大噴火による埋没村落(鎌原村)の発掘調査』(学習院大学 昭和57年)による)

### (3) 驚くべき鎌原村の復興

#### 幕府役人の記録『みみぶくろ耳囊』より

#### 新たに家族を編成

(『耳囊(上)』(岩波文庫)より「蒲原村異変之節奇特之取計致し候者の事」の一部を現代語要約。この節の全体現代語要約は配布資料にあります。)

浅間山大焼けの折、生き残ったのは子供を入れてわずかに 93 名。その人たちは途方にくれていたが、近隣の大笹村の長左衛門、干俣村の小兵衛、大戸村の安左衛門という奇特的(感心な)者が被災地に簡易住宅を建てて 93 名の者達を住ませ、麦や粟などを送って養った。

そしてこの 3 人は次のようにして鎌原村の復興を図った。

◆「このような“大変”(=大災害)に遭遇して生き残った 93 人は、互いに肉親と考えるべきだ。」と生存者を説得して、これからは互いに親族として生活することを約束させ、次の手立てをとった。

◆災害が収まると、3 人は 93 人の者達を酒肴で慰労した。

◆夫を失った女には妻を失った男を組み合わせ、子を失った老人には親のない子供を養わせ、残らず家族とした。

3 人のうちの小兵衛が言うには「我らの村は同じ郡内だが鎌原村と離れているので、今回大きな被害を受けなかった。しかしこの困難に加わろうと思うなら自分の身上(自分の財産)を捨てて、苦しんで人を救うべきだ」と、財産を惜しまず急変を救おうとした。後日 3 人に褒美を渡して苗字帯刀を許可するために呼び出したが、小兵衛はこのような働きをする特別の人には見えず、平凡で誠実そうな老人だった。

「耳囊」は旗本・根岸鎮衛やすもりが当地の復興役人だった際の記録です。幕府の中堅的な役職にありながら、地方(農村部)の庶民の姿をよく観ています。身分の下者に対しても驕らない人柄が悲惨な災害を冷静にとらえ、そして温かい目で人々の様子を記録しています。小兵衛の下線部の言葉は、「この困難と一緒に  
なって立ち向かおうと思う」とか「一番苦しんでいる人に自分も寄り添う」ということではなかったでしょうか。こうして鎌原村では新たな家族構成をして、災害後 11 戸のして再出発したのでした。このような構成をすることは現代の感覚か違和感があるかもしれませんが。被災後に作られた鎌原村の『飢人夫食割帳』には、一人世帯も二桁、二人世帯や三人世帯、五人世帯などもあったことが記されて、必ずしも無理やり組み合わせたのではないのではないかという考察があります。また、当時の生存者が埋まった村の上に再建を図った理由も不明です。



現在の鎌原地区

(『天明三年(1783)浅間山大噴火による埋没村落(鎌原村)の発掘調査』学習院大学 昭和 57 年)

# おわりに

## 富士山噴火の降灰予想図



『富士山ハザードマップ検討委員会 報告書 平成16年6月』より一部改 (内閣府ホームページ所収)

記録に残る富士山の大きな噴火は江戸中期、宝永4年（1707年）でした。当時、江戸にも多くの降灰があり、昼でも行燈を灯したり農作物への被害、呼吸器疾患があらわれたそうです。（新井白石『折りたく柴の記』、伊藤祐資『伊藤志摩守日記』等）

この噴火の49日前には南海トラフを震源とする大地震があり、それが噴火に繋がった可能性があるようです。（『日本火山学会講演予稿集』1990年、2003年）この時と同程度の噴火が起きた時の降灰予想図が上の地図です。

今回の展示「浅間山噴火と越谷」で見た先人たちの行動からは様々な教訓が得られます。ご来場いただき、誠に有難うございました。

令和7年（2025年）

越谷市教育委員会

令和7年度企画展  
「浅間山噴火と越谷」  
配付資料

(レイクタウン防災フェス関連事業)

## パネル⑤ 【『越巻中新田の産社祭礼帳』現代語要約】 (越谷市指定有形文化財 古文書)

みづのとう  
天明三 癸卯(1783年)

六月中旬は大雨で田の下部は水腐れを起こし、その上に夏から秋まで寒くて二、三月の頃のようにだった。七月六日(太陽暦で八月三日)より信州浅間山焼け出し、砂降りが七日八日までであった。浅間山周辺では所によって二、三尺から四、五尺(60～150 cm)積もった。この辺(越ヶ谷宿、越巻村)では一、二寸(5 cm前後)の所もあった。また、硫黄の山から泥水が押し流れ出て、民家や人馬を押し流した。利根川に流された人馬、数千が重なり合って、利根川では数十cmのすき間もなかった。関東全体で全ての田畑に御検見(収穫量調査)の役人が入り、ある所は(年貢が)二分、三分引きになり、またある所は六分、七分引きになった。(割引が)無い所もあった。

## パネル⑥ 【『西方村旧記 参』現代語要約】 (越谷市指定有形文化財 古文書)

天明三 卯年

「信州浅間山大噴火砂降りで凶作になり難儀した事」

信州浅間山の大焼けによって、この辺の砂降りは七月六日の初めの頃は、少し震動して風が強い時は砂を吹き上げて薄煙のようになった。少しずつ何か降ってきたようだと思って庭に鏡を置いてみると砂が確認され、それがだんだん強くなってきた。翌七日にはさらさらと見えるようになり、八日には昼でも行燈を灯して食事する有様で真っ暗になった。とんでもなく震動も強くなり、降る砂も多くなった。何事だろうと驚いていると、信州の辺りは震動激しく、雷、風雨、夥しい砂利が降って大荒れの様子だ。翌日には降り砂が収まったが、この辺りでは一坪(3.3 m<sup>2</sup>=畳2枚分)当たり一合五勺(約 270ml=コップ1杯半)の砂(灰)が降った。次々ともたらされる情報では、浅間山噴火はことのほか大規模で、その近くでは家の軒までも焼け砂利に埋もれ、利根川には熱湯のような赤い泥水が土砂と共に流れて、堤防も破られるような大水が流れ、家だけでなく人馬の死骸が何千万とも知れない数が流され、見る人、聞く人は皆強い衝撃を受けて、将来何世代にも忘れられないことである。

一、この辺り(越ヶ谷、西方近辺)は砂(灰)が一坪(3.3 m<sup>2</sup>=畳2枚分)当たり一合五勺(約 270ml=コップ1杯半)ほど降ったが、格別支障もないと思っていた。だが硫黄の山の焼け砂なのでことのほか有毒のためか、五、七日も経つと作物への悪影響も出始めて、葉が赤くなって実らなくなった。早稲や中稲は五分の出来具合だが、遅稲は穂が出ずに大凶作となった。このことで御検見をお願いしたら税を五分引きということで、村方としては大いに困窮した。勿論、お奉行所様よりおっしゃられた趣旨によって夫食(農民の食糧)に追加する藁餅(藁を刻み、さらに粉にして米粉などと練り合わせて餅にした非常食)の作り方についてのお触れ(指示)もあるほどだった。

パネル⑧ **『耳囊(上)』(岩波文庫)より現代語要約**

浅間山大焼けの折、生き残ったのは子供を入れてわずかに 93 名。その者たちは途方にくれていたが、近隣の大笹村の長左衛門、干俣村の小兵衛、大戸村の安左衛門という奇特な(感心な)者が被災地に簡易住宅を建てて 93 名の者達を住ませ、麦や粟などを送って養った。

「百姓は相手の家柄や素性をよく見て、たとえ裕福な者であっても以前からの結びつきが強い者でなければ座敷にも上げないものだが、このような“大変”(=大災害)に遭遇して生き残った 93 人は、互いに肉親と考えるべきだ。」と 3 人は生存者を説得して、これからは互いに親族として生活することを約束させた。

災害が収まると、3 人は 93 人の者達を酒肴でもてなした。そして、夫を失った女には女房を失った男を取りあわせ、子を失った老人には親のない子供を養わせ、残らず一族とした。このような大災害に遭遇しての計らいは、とても興味深い。

3 人のうちの小兵衛は資産家ではないようだが商売をしているとのこと。その小兵衛が言うには「我らの村は同じ郡内だが鎌原村と離れているので、今回大きな被害を受けなかった。しかしこの困難に加わろうと思うなら、身上(自分の財産)を捨てて苦しんでいる人を救うべきだ」と、財産を惜しまず急変を救おうとした。後日 3 人に褒美を渡して苗字帯刀を許可するために呼び出したが、小兵衛はこのような働きをする特別の人には見えず、平凡で誠実そうな老人だった。

天明3年7月8日(太陽暦では8月5日)の大噴火は午前10時頃ですが、噴煙と降灰で薄暗くなった中での避難でした。



観音堂に避難する人々

©一般社団法人日本昔ばなし協会／日本財団海と日本プロジェクト

**飢饉(ききん)**

農作物が実らずに、多くの人々が飢える状態のことです。

原因は直接的には自然災害(噴火、水害、台風など)が多いですが、その時の社会状況によっても被害が増大します。

江戸時代には享保(18 世紀前半)、天明(18 世紀後半)、天保(19 世紀前半)の三大飢饉がありました。今回の展示は天明の大飢饉が関係しています。東北や関東を中心に全国で 90 万人以上の餓死者を出したとも言われています。(石井寛治『日本経済録』(東京大学出版会)他より)

「海の民話のまちプロジェクト」として、浅間山噴火の被害と復興をアニメーション化した動画「鎌原観音堂石段ものがたり」を、右下の二次元コードからご覧いただけます。

このプロジェクトは日本財団「海と日本プロジェクト」の一環で、日本各地の無形文化財である海の民話を「海ノ民話アニメーション」として有形化し、アーカイブして次世代へと語り継ぐ取り組みです。

